パネルディスカッション

コーディネーター

佐藤　信（人間文化研究機構理事）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授を経て、現在、大学共同利用機構法人人間文化研究機構理事。東京大学名誉教授。専門は日本古代史。博士（文学）。

パネラー

熊谷　公男（東北学院大学名誉教授）

國下多美樹（龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻教授）

八木　光則（岩手大学平泉文化研究センター客員教授）

若狭　徹（明治大学文学部准教授）

村﨑　孝宏（熊本県教育委員会）

（司会）

皆さまお待たせいたしました。ただいまよりパネルディスカッションを開始いたします。まず初めに、パネリストの方々をご紹介させていただきます。東北学院大学名誉教授熊谷公男様、龍谷大学教授国下多美樹様、岩手大学平泉文化研究センター客員教授八木光則様、明治大学准教授若狭徹様、熊本県教育委員会の村崎孝宏、以上五名の方々にパネリストを務めていただきます。そして、コーディネーターは人間文化研究機構理事佐藤信様にお務めいただきます。それでは佐藤様のプロフィールをご紹介させていただきます。佐藤様は、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了、奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授を歴任され東京大学文学部助教授、東京大学大学院人文社会研究科教授を経て二〇一八年、平成三十年より大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事、東京大学名誉教授でいらっしゃいます。専門は日本古代史です。本日は「古代の山城と東北城柵」をテーマにパネルディスカッションを進行していただきます。それでは佐藤様、どうぞよろしくお願いいたします。

（佐藤）

どうぞよろしくお願いいたします。この鞠智城シンポジウムももう十

回以上になってきたわけですが今日皆さま方、朝からこの時間まで、五人の先生方のご講演を聞かれてもうだいぶ満腹感がおありじゃないかなと思います。私もまだ今日の話全部整理しきれておりませんけれども、すごい新しい視覚で鞠智城を巡って、あるいは今回は山城と城柵との関係等について興味深い話を伺うことができたと思っております。で、今日は、これから十七時三十分までを目指してパネルディスカッションを進めていきたいと思っております。一応、三つぐらいのテーマに分けて章立てをしたいというふうに思っております。一番最初が「東北の城柵と西日本の山城との関係」ということで、とくにその中では軍事的な施設であるか行政的な施設であるかと、まあ役所であるのかという面、それは立地の問題とも関係してくると思いますけれども、そういうテーマについて一番目の柱にしたいと思います。二番目の柱はこの山城、東北城柵の造営主体、あるいは造営したあとの経営の主体についてどういうところで造営、どういう単位で造営されたか、あるいは日常的な経営がど

う行われたかということで、これは律令国家との問題もありますし、九州の場合は大宰府が間に入る場合があると思いますが、それぞれの国、国司ですね、東北の場合は陸奥国司との関係みたいなものもあると思いますし、あるいは郡レベルの名前がついているというお話も今日ありましたけれども、それぞれのレベルが実際の経営には関与してくるんだろうと思います。その主体がどうであったかというようなお話をしたいなと思っております。最後に三つ目は、一つは鞠智城についてはよく言われてきたことなのですけれども、歴史書に名前が載るかどうかということがちょっと気になっておりまして、鞠智城は六九八年に繕治したという記事があって、そのとき大野城と基肄城と鞠智城が繕治されたという、その三つの山城が十世紀ぐらいまで機能する。ほかの山城は八世紀の前半ぐらいには、もう機能を終えてしまうのに、その後も機能していくっていうことが言われております。東北の城柵の場合も名前が六国史に留めてあるものとないものとがある。そういうものをどう考えるか。まあ山城の場合は、いわゆる神籠石式の山城っていうのは、あんまり記録を留めていないということがございますけれども。そういうことを最後にちょっと議論してそしてまとめてみたいというふうに思っております。

まず最初に、城柵と山城の比較ということで、軍事的な面と行政的な面とについてちょっと議論したいと思っております。最初に熊谷さん、今日はちょっと、このパネルディスカッションでは、「先生」と呼ぶのをやめて「さん」付けで呼ばせていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

熊谷さん言い残したことを含めてちょっとお話していただきたいと思います。

（熊谷）

まず立地の問題ということですけれども、先ほどもお話しましたように城柵と山城というのは、非常に対照的な立地だということはもう明らかだと思うのです。立地というのは何を意味しているかというと、創建当初の設置目的、あるいはその施設に国家側が期待したといいますか、意図した役割が反映されているというふうに考えられると思うんです。で、端的にいって、最近の議論では先ほどもお話しましたように、支配拠点、地域支配の拠点というような機能と、それから防衛拠点、山城であれば対外的な防衛拠点、城柵であれば東北の蝦夷に対する防衛拠点、こういうことがどう絡んでいるのかということで、議論が行われていると思うのですけれども。これは私のにわか勉強したうえでの考えなんですけれども、支配の拠点という機能とそれから防衛拠点という機能は極論すると両立しがたいものだと思うのです。それはどういう意味かというと、支配の拠点というのは地域支配を行うということですから、山のてっぺんにいて地域支配というのが果たして行えるのかということがあると思うのです。やはり、周辺地域を治めるということは周辺地域とのつながりが非常にいいところじゃないと当然うまくいかないと思います。それに対して防衛拠点というのは、敵が攻めてきた場合、どの程度防御できるかっていうことですよね。ですから、これはもう山のてっぺんのほうがいいに決まっ

ているわけです。ですから、非常に単純化したいい方をすれば、いまお話したように両方の機能というのは両立しがたい、ということが私の基本的な立場です。それで東北の城柵をみてみると、ほとんどが交通の要衝に立地しています。主要な幹線道路あるいは河川、さらにけっこうあるのが運河なのです。運河で海なり主要河川とつなげるというようなことをやっています。つまりそういう形で周辺地域との交通といいますか、つながりというのを密にしておかないと支配はできない。ただもう一方でそういうところに立地すると攻められやすいとういう欠点もあるわけです。ですから現実に八世紀には多賀城、伊治城、そのほかにも桃生城とかが、あるいは秋田城も九世紀末近くになってから蝦夷に焼き討ちされています。ですから、攻撃を受けるリスクは当然上がるわけですが、それ以上にやはり支配をどうするかということの方が優先されたんじゃないか、城柵はそういう立地ではないかと思うのです。それに対して、山城を見れば、先ほどもお話しましたようにもう違いは明らかで、少なくても創建当初の機能というのは当然のことながら、防衛、対外的な防衛の拠点ということが最優先された立地だと考えざるを得ないと思います。問題はその後、二次的に地域支配に関わったのか、関わったとすればどの程度、どういう形で関わったのかということはまた次の問題になると思うのですけれども、この点につきましては、やはり先ほどもお話しましたように鞠智城は別格だと思うのです。そもそも立地が、玄界灘方面から一番奥まったところにありますし、それから大野城とか基肄城と比べてみてもそうだと思うのですが、やはり丘陵地であって、そんなに険しい山ではないというのもあり

ます。ですからこれは、奈良時代にあまり使われなくなる時期があるというお話でしたけれども、そこで性格なり機能が変わって、二次的に地域支配に関わるようになったのかなというふうにいまのところ思っております。

（佐藤）

ありがとうございます。まず、立地の方から山城の場合は高いところにあって、あの、東北城柵は低いところにあるという違い。そして、それぞれの機能で二次的には機能の変遷もあるかもしれないということですが、これについては鞠智城について言いますと、もちろん造られたときは白村江の戦いの後の国際的な緊張の中ですから、防衛ということがあるんですが、九世紀代になると、正倉院的な機能がもっぱら史料には出てくるということも、あるということだったと思いますが、今の点については、村﨑さん鞠智城の調査研究されている立場からはいかがでしょうか？鞠智城については防衛的な面とまあ地域支配というか地域支配の面は官衙的な性格をどうみるかということもありますけれども、官衙的な性格をどうみるかということについてはいかがでしょうか。

（村﨑）

官衙的な機能について、どう考えるかということなのですけれど、鞠智城で確認されている「コの字」

形に配置された建物群が、正しく「コの字」形配置として官衙的な機能を持った建物施設であるかどうかというのがまだ完全な形で解明ができていません。鞠智城の南側、菊鹿盆地の中にも菊池郡の郡家推定地の西寺遺跡ですとか、それから少し時代的には新しくなるのですが、八世紀代から九世紀代にかけて、鞠智城の北西側に御宇田遺跡という官衙的な建物遺構も見つかっています。ですから、丘陵を下りたところに官衙的な機能を持った遺跡が見え隠れしている。それじゃ丘陵の上に位置する鞠智城の機能と役割をどう考えたらいいのか。鞠智城にそういう正倉がたくさん造られる。それが、鞠智城周辺の「郡家」、「郡衙」とどう関わるのかというのがこれから詰めていかないといけない課題なのかなというふうに認識しています。

（佐藤）

国際的緊張から離れると、倉庫群としては稲穀（とうこく）を納める倉庫群としてずっと機能が続いているということは間違いないということですね。九世紀ぐらいでむしろ倉庫群が、総柱の倉庫群が礎石建ちになって立派になってくるというお話が今日あったと思いますけれども、そういう機能は続いているということかと思いますが、一方で熊谷さんのお話の中では山城は、私は後の城郭、日本城郭史の立場からいくと詰めの城っていうか、敵が攻めてきたときに立てこもって、そのストックしてある米穀を食べながら耐え忍んで、敵の兵站が切れて、帰っていくのを待つっていうことのようなことを、山城

の機能として思うのですけれども、そういう意味ではあの稲穀を 貯積するということと逃げ込むということ。その点では熊谷さんが鞠智城はやっぱり特別だといわれたのは、鞠智城があんまり山が高くないということと、生産地帯のおそらく古代では菊池川流域がもっとも九州では米の生産の中心的な地域であったというふうに、これは、『和名抄』などに見られる。あるいは『延喜式』の稲の存在形態から見ても九州を代表する米穀生産地帯っていうのは肥後の国なのです。筑前、筑後よりもはるかに多い米穀生産地、農業生産地帯だと、そこに置かれているっていうこともちょっと意味があるかなと思うのですけれども。詰めの城っていうことからいくと平城京などの場合も最初の頃は、高安城があったりしたっていう感じもするのですが、今日は國下先生が羅城との関係でお話いただいたわけですけれども、そういう点ではちょっと関連してお話いただけませんでしょうか。

（國下）

軍事か行政かというポイントですが、都を見ていますと、まず行政というか政治でなければならないということだろうと思うのです。で、その政治を行って行く上で日本の律令国家の場合には、天皇を頂点とする、ピラミッド構造というのがあって、それは儀式を行う場としての空間が必ず確保されなければならないということが一つのポイントなのだろうと思うのです。今日、私の資料でご説明できなかった資料で8ページに、宮殿の図がございます。図1は歴代の飛鳥時代から平安京にいたる宮

殿の一番の中心部の絵が描かれているわけです。で、ここがつまり天皇が日常生活をする内裏があり、そして政治を行う場である大極殿、朝堂院があるという基本的な国家の政治を行う、あるいは儀式を行う場であるということなのです。これが一つ、律令国家における政治力の行い方といいますかスタイルというものの基本形になっているということから思えば、それは地方における行政体として生きていく場合でも、一つのお手本がここにあるということですから、これが模範になって形として作られていくということなのだろうと思います。従って政庁域っていうものの模範は、一つは内裏ということが言われていましたが、時代によって内裏もまた使われ方が変化するわけですから、天皇が政治を行うのと同じように、地方における役所に相当する郡家がどのような形で政務を行うのかという、その中心的な行い方こそが政庁として現れるんだろうという、全く無関係なものではないというのはこういうところからおわかりいただけるんじゃないかなと思います。

（佐藤）

そういう律令国家の支配ということを考えるとやっぱり、國下先生が言われた「儀礼」というものがいかに大事かということで、そういう儀礼的な空間としての、東北城柵でいうと内郭の政庁に、相当するものが山城の場合にどうあるか、この点は村﨑さんいかがでしょうか？

（村﨑）

鞠智城の中でそういう儀礼的な空間というのが、現在、想定できるかというと想定できていないというのが現状かなというふうに思います。ただ、祭祀的な建物遺構といいますか特殊な建物として八角形建物が二棟確認されていますので、それがどういうふうな形で、その部分を利用しているのかというのは今後の検討なのかなというふうには思っています。

（佐藤）

どのランクの政治を行うかという差はあると思いますけれども、地方におかれた公的な施設の場合、私は、正倉院の場合でも正倉院に田租（でんそ）や出挙稲（すいことう）を納める儀式だとか、あるいは出挙稲を配る儀式、全国の郡家におかれた正倉院では行って、そういう意味でも儀式の場はそれなりにあるんじゃないのかなと思っておりまして、それはレベルがちょっと国庁である国府の中心の国庁である儀式か郡家の郡

庁である儀式かっていうのは別ですけれども、それはそれなりにあるのかなという気はいたしますけれども。鞠智城の中にも正倉だと私も考えております総柱の建物がたくさんありまして、あとは配置が本当には郡家におかれる正倉院と同じように北一行の第三の倉庫だとか西の一行目の第四の倉庫だとかそういうのが見えるとそういう正倉院とのリンクもわかってくると思いますが、山城の正倉の場合はわりと立地に規制されているという気がいたしますが、鞠智城の場合はその中ではちょっと平地が広いなというのでちょっと違うかなという気もいたしますけれども、そういう儀礼っていうものは山城の中でもどう考えるかっていうことはこれから課題だと思いますが。八木さん、今までの議論の防衛、軍事的な機能と統治的な機能、あるいは立地の問題、儀礼空間についてお話いただけないでしょうか。

（八木）

行政あるいは軍事というのは熊谷先生のおっしゃったところで、基本的な部分は言い尽くされていると思います。で、私が今日申しあげた中で、巨大化するという部分について補足しますと、一つにはその巨大化する意味はなんなのか。先ほど触れましたけれども三十八年戦争というものが大きな契機になっているわけです。そのモデルというのはもしかすると西日本の山城をモデルにして、そして、丘陵部を大きく取り込む。規模からしますと一km以上、一・五kmとかになりますが、一回りすると三km、

四kmというそういうような規模になっていきます。そうしますと、そのモデルというのは山城に求めることもあながち間違いではないような気もしたりします。そういう意味では、少なくとも巨大化する意味合いというのは、西日本との関連性というものを何か読み取ることができるのではないかなと思っています。それから、政庁などの空間につきましては、やはり基本的には、今のところ山城のほうには見つかっていないということですから、そういった機能は元々ないのではないかという結論にならざるを得ないだろうと思います。そういう意味ではやはり、東北の城柵と西日本の山城とではやはりあの基本的な性格が違うだろうというように考えられます。

（佐藤）

ありがとうございます。城柵の巨大化というのが、払田柵とか宮沢遺跡とかですかね。それが、律令国家の歴史あるいは蝦夷との関係の中で理解できるということなんですが、その次を考えると一番最後に徳丹城はわりとこじんまりとしています。巨大化の後もそういうのが逆にコンパクトになって、蝦夷との三十八年戦争も終わりを告げるわけですからそれはそう考えてよろしいでしょうか。

（八木）

巨大化するのは、やはり三十八年戦争、宝亀段階の多賀城が焼かれたという国府が焼かれたという、

そういった衝撃が大きかっただろうというふうに思います。徳丹城ができるのは、その三十八年戦争の直後にできるわけですけれども、その間にいわゆる徳政相論ということが起きます。徳政相論は、八町規模の志波城が八〇三年に造られて、その二年後に徳政相論が起きます。桓武天皇の前で、公卿の主だった二人が議論をするわけです。平安時代の初めですからそのときは平安京の造営と、それから東北の軍事行動、これが非常に大きな負担になっていました。ですからその二大事業を止めようということが議論されました。桓武天皇も晩年で、中止案が裁可されます。そういった後に徳丹城というのができますので、かなり緊縮財政の下で造らざるをえなくなった。そうすると巨大化というような波からもうすっかり外れてしまいます。その前にできた払田柵の場合には徳政相論の前にできましたから、巨大化が行われたんだろうというふうに思います。八〇五年の動きが中に介在しているので徳丹城とは違うということになりますね。

（佐藤）

それはその後ということですね、分かりました。それでは、今の問題とリンクするんですが、第二の柱に早速入っていきたいと思っておるんですが、造営や経営の主体がどうであったかということで、東北の城柵や西日本の山城が、例えば九州の鞠智城の場合は六九八年の『続日本紀』の記事だと律令国家が大宰府に命じて大野城と基肄城と鞠智城を修理させたと、繕治させたと繕い治めさせたという

ことでありまして、主体は律令国家なんですけれど、直接には大宰府が財源も出すし大宰府によって修理をさせたということになります。これは肥後の国が鞠智城を直接やったということでは記録には出てこないということなんです。東北の城柵の場合も、郡山遺跡、多賀城の前身の郡山遺跡は、藤原京の時代の遺構や遺物がたくさん出てくるということで、おそらく中央政府が直接関与していると私は思っているんです。多賀城もそうだと思いますけれども、その後どうなっていくかっていうことも含めてだと思うのですが、これについては、八木さんいかがですか。

（八木）

おっしゃるように、造営にあたっては中央政府の大きな力で動いているはずです。先ほど申しあげた徳政相論の前、緊縮財政になる前は東北、関東中部地方からの人であるとか物であるとかそういったものが大量に動員されてきた。徴発されてきたわけですが、それが相論後はかなわなくなった。例えば、陸奥の国から陸奥の国というその範囲で動かざるをえなくなってしまったということからしますと、その経営というものはだんだんと国家から陸奥国あるいは出羽国という、そういった規模に縮小した可能性が考えられるのでないかなと、そういうふうに考えております。

（佐藤）

今の点については熊谷さんいかがでしょうか。造営と経営がまたちょっと違うこともあると思いますし、私は律令国家が造ったとしても国も関与するし、地元にある郡も関与して、鞠智城の場合は地元の菊池郡からの五斗一俵の米の荷札木簡が鞠智城から出土しています。これは地元の郡の郡名が書いてないことからすると菊池郡衙の、郡内の人が鞠智城に五斗一俵の米を納入しているということは確実だと思っておるんですけれども、あのそういう造営とか経営のレベルの問題というのはいかがでしょうか。

（熊谷）

東北の城柵の場合、文献史料から見ると奈良時代から鎮守府が主導している例というのが、いくつか見えてきますので、そういう意味では、例えば「鎮兵」とか「柵戸」（城柵周辺へ送り込まれた移民）を労働力として動員して造営していることが分かるケースがあります。あとは例えば、伊治（これはり）城を造営するときには地元の有力豪族である道嶋（みちしま）氏というのがいたのですけど、いまの石巻のあたりに。道嶋三山という人物が国司に抜擢されて、それが陸奥の国内の労働力の徴発の責任者みたいになって、一ヶ月に満たない短期間で完成させたというような記事が『続日本紀』に出てきます。ですから、史料から分かる範囲でいえば、そういうふうに、陸奥国レベルでは、奈良時代の鎮守府というのは陸奥の国

司が兼務しているのが大半なのです。ですから、そういうことから考えても国が主導していたというふうに見えるのですが、じゃ国は国独自の裁量でそういうことを全部やれたのかというと、それは律令国家のシステムからいって考えがたいので、中央の指示を受けたうえで国が主導して造営に当たるというような形だったのかなというふうに思います。

（佐藤）

だから、伊治城の造営のときも、道嶋の宿禰も関係するけれども、実際には伊治呰麻呂（これはりのあざまろ）も郡司大領として関係していて、そこで差別的な扱いを受けて頭にきて決起したみたいなところがあるのかなと思うのですが、だからやっぱりそれは律令国家の命も受けているし、国府のあるいは鎮守府将軍の命も受けるし地元の郡も協力してできるということですよね。

（熊谷）

指示はいちばん上は国家からくると思うのですが、結局労働力の動員というレベルになるとやはり地元の顔役といいますか、なんか最近原発でも聞いたような話ですけれども、そういうことが大きな意味を持ってくると思いますので、重層的だったのじゃないかというふうに思います。

（佐藤）

その地域の勢力っていうのもやっぱり大事だったと。そこで、若狭さんにちょっと、今日は古墳時代に遡って、古墳時代以来、前方後円墳だとかの時代以来、大和の王権と東北の間も密接な関係がある時期、ない時期あって、それはそれぞれの段階でやっぱり中央の大王の権力と東北の地方豪族が同盟したりしながら、だんだんと律令国家のもとでは、もう地方豪族が軍事みたいな形になっていくのかなと思いますけども。それでも、律令国家の時代でも今の熊谷さんのお話のように伊治郡の郡司がやっぱり協力するとかしないとかっていう、ときには反乱することもあるというようなことだと思うんですけど。その大和王権と東北の勢力との関係っていうのをどういうふうに見て、私たちはどちらかというと律令国家の時代の国家組織から遡ってみてしまうと、あたかももう最初から地方豪族が従属的な位置であるかっていうとそうでもない。同盟的な関係も私はあり得たというふうに思うんですけれども、そこらへんはどうどうでしょう。今日のお話の弥生時代から律令国家の時代までを見たとき中央というか畿内の王権、あるいは律令国家と東北地方との関係というのをその間に東国の勢力が関係することもまたあったと思うのですけども。どうみたらいいかというのをちょっとお考えがあれば聞かせていただきたいのですが。

（若狭）

想像を交えて申しあげますと、やはり東北の広い大地と潜在的な生産力や資源、それを東国の人々は希求しているんだと思うんです。古墳時代前期には広大な土地が空いていて、そこに環境難民が来る。首長に率いられて組織的に来ているんだと思うんです。それなので、大きな古墳もすぐできる。そういう首長たちが大挙して来ているので、その枠組みの人たちが共立王を推し立てて一六八ｍもの前方後円墳を築くことができた。王権と東北圏との連合の中心となる大勢力がまつりあげられたんだろうと考えます。しかし、東北はたいへん厳しい環境なので寒冷化とかによって、それが萎んでしまったりする。それは弥生時代にもあるんです。弥生時代前期末には、いち早く稲作を津軽に導入していますが、これは関東より早いわけです。稲作は、関東、中部よりも早く津軽に入っているけども、それが終息していくという流れがあった。そういった新しいものを取り入れる、それは東北の人だけではなくて南の人も新天地を目指してその広大な資源に着目し、東北を目指す。しかし、環境の変化との鬩ぎ合いのなかで、また撤退せざるをえないというそういう繰り返しだと思うんですね。

実は、律令期もそうなのではないか。つまり律令期の国家的北方政策の裏に、東北の豊かな資源、それは農地だけではなく、海産物・皮革・鉱山資源などに対する経済的な欲求がないまぜになって、進出していくのでしょう。そういう観点で政治制度の裏にある経済的な欲求や軍事力への憧憬とかそういったものを含めて、東北の社会や首長たちを考えなければいけないと思っています。

（佐藤）

今日は、遠距離交易みたいな交易がいかに盛んだったかっていうことを、改めて若狭さんのお話で実感したのですけれど。東北の立場からいくと、やっぱり北方の産物で馬だとか金だとか、それから北方との交流の中でも昆布だとか獣の毛皮だとかそういったものが、大和王権から見ても律令国家もそうだったわけですけれども、喉から手が出るぐらい。これは、平安時代の摂関時代の貴族もそうだったと思いますけど手が出るぐらい欲しいというようなことがあって、その交易を仲介するということだと思うんですが、今日の若狭さんのお話の中で東国の東海地方の人がこっちに関東に移って、関東地方の人、東国の人が北にまたに来るっていうようなお話があって。例えば、若狭さんおられたのが上毛野（かみつけの）国におられたわけなのですけれども、上毛野君も『日本書紀』なんかでは蝦夷と大和王権の戦いの中で将軍になったりしているっていう、そういう東北の勢力が間に介在するっていうこともあるわけでしょうか、今日は北陸の勢力のお話もあったんですけれども。

（若狭）

古墳時代後期後半、六世紀後半段階では関東地方の豪族たちの北進というのも当然あったと思っています。国造が設置されなかった北の仙台平野などは有力な終末期古墳がありますし、そこと常陸の関係が示唆されています。常陸の首長層の一部が拠点を移すということも当然あったでしょう。そう

いった人たちが次の担い手になっていく可能性は高いと思いますが、それとちょっと違う形で気になるのは宮城県北部の状況で、ここには首長墓がないのです。群集墳と横穴墓しかない。ただそれらは大量にあるし、関東系土器が多く出てくる。ということで、その東北地方の集団の中にも首長に統括されている人たちとそうでない人たちという多面性があります。その辺りをしっかり研究していく必要があるんじゃないかと思っています。

（佐藤）

だから東北と大和との関係が、そう一元的な関係じゃなくて私はもうちょっと東海だとか東北の勢力だとか北陸の勢力とかあいだに介在しているっていう場合もあるかなあというそういう様々な意味でのこう境界を越えた広い意味でいうと交流みたいなものの中で東北の歴史もあったかなという。熊谷さん、律令時代でも東北の人々がたくさん柵戸（きのへ）などとしていって東国の地名が東北にもいったりしていますよね、それはやっぱり人的にも鎮兵もそうだけれども、かなりいっていると思ってよろしいでしょうか。

（熊谷）

いちばん最初に城柵を造ると出てくる渟足（ぬたり）柵、磐舟（いわふね）柵のときから『日本書紀』に出てくるわけです

けれども、柵戸（さくこ）、本来の読みはキノヘですけれども、その柵戸というのが、北陸などから連れてこられるというのがあって、その後も、多賀城ができる少し前ぐらいに陸奥それから出羽、そのころ出羽国ができるわけですけど、出羽国でも建国直後ぐらいに非常に組織的に柵戸が連れてこられるんです。それは、おそらく城柵のまわりにそういう人たちを住まわせないと、城柵の維持経営というのが非常にむずかしい。これは面的な支配ですので地域支配なのですね、城柵の場合。ですから、城柵を造れば終わりではなくて、城柵を造ったらそれを維持していくための人員も必ず連れてくると、そういうシステムをとっていたわけです。ですからかなりたくさんの人たちが東国なり北陸から陸奥・出羽にやってきたということは間違いないと思います。考古学的にも先ほどもお話に出てきましたけど、関東系の土師器というのが、柵戸が文献に出てくるよりは少し早めぐらいからなのですが、かなりの量が見つかっているというのもありますので。ですから、数としてもかなり来ていたのかなというふうに思います。

（佐藤）

これは八木さん、考古学的に関東地方の土器が今日のお話にもあったように思いますけれども、東北でも出るけれど。私はそういう交流って一方通行はないと思っていて、相互交流だと思いますので東北のものがまた内国、律令国家の内国というかそっちにいくっていう場合もあるように思うんです

が、そういった点いかがでしょうか。

（八木）

数はまだそれほど多くはないんですけれども、例えば山梨県や東京都で岩手県の北上盆地の土器に似たようなものが入っています。そういったこともありますし、あるいは千葉県の方に宮城県の土器が入っていったりとそういうことも明らかになっていますので、決して一方通行ではないと思います。ただ、数の面でいえば圧倒的に東北に流れてきていることは事実だろうと思います。で、そういった土器と一緒に住居の造りも入ってきているのです。東北地方の住居というのは、竈（かまど）が作られるんですけども、その竈は壁にトンネルを掘って外に煙を出すという煙の道、煙道を長く作るというのが大きな特徴です。関東地方にはそういうのがないわけではないのですけども、多いのは煙道が長く伸びないタイプの方が一般的です。そういったものがかなり東北地方に入ってきているのも事実です。移民というものを考古学的にどう捉えるかということなのですが、そういった土器が入っていること、そしてその住居の造りが入っていること、そういったものを総合的に判断する、あるいはその集落の中でどのぐらいの割合を占めるのかっていうことを一つずつ検証していって、移民というものを考えていくべきなのかなというふうに思っています。そういう意味でたくさん本当に来ているとは思うんですが、まだちょっと検討の余地がある遺跡もあるのかなというふうには思っているところです。

（佐藤）

そういう、國下さん中央の都を例えば七世紀代に、飛鳥の遺跡では蝦夷や隼人を饗宴（きょうえん）でもてなしたみたいな記事が『日本書紀』にいっぱい出てくるわけですけれど。その後の、平城京も含めて中央の長岡京とか平安京あたりでもって、そういう北方だとかあるいは南方のものが出てくるとか、そういうことはありませんでしょうか？いかでしょうか。

（國下）

もちろん、東北の土器も出ますし九州の土器も出てくるわけですが、ただ数は少ないですね、未だに。やはり、さっきおっしゃったように数の面では現地の方がたぶん多いんじゃないかなと。畿内産土師器って呼ばれるような、暗文を施す土師器は都の土器として都らしい土器としてよく作られるわけですが、それが今日のお話にもありましたが、鞠智城からも出ています。そういうようなことで都から逆にいくものもあるというようなこともあったり、あるいは、東北と都とを結ぶ焼き物としては須恵器の長頸の壷がですね「壺G」っていうものが出ていて、それは伊豆で生産されているものだけども関東や東北から出てくると、都からもちょうど長岡京の時期前後に集中的に消費されているっていうようなことで、一つの焼き物が都と生産地とそして東北、多賀城あたりと繋げていく材料にもなっていますよね。

（佐藤）

都はもちろん、諸国から調庸物が集まってきて私、専門の木簡の荷札木簡なんかは都からも長岡京、平安京も平城京もそうですけれど、たくさん各地のものが出てきてそういう意味でのなんか非常に幅広い交流が古代でもあったというふうには思っているんですけど、八木さんどうぞお願いします。

（八木）

先ほどちょっと言い忘れたのですが、九州でも東北と似たような土器が出てまいります。長い煙道（えんどう）も福岡県黒添・赤木遺跡など、九州で見つかったりしています。そういう意味では東北地方からの人の流れというものが見てとれるのですが、ただ土器を見ても東北の土器そのものではないんです。やはり少しアレンジされている。もしかすると、一世ではなくて二世、その子どもとか孫が作ったものなのかもしれません。蝦夷の場合には俘囚（ふしゅう）の移配ということがあります。俘囚は蝦夷が地元から離されて、全国各地に流されるわけですが、それらは交流とか交易というものとはまた別の視点で見なければいけないと思っています。

（佐藤）

じゃあ國下さん。

（國下）

竪穴建物の話が出たのですが、実は都っていうのは、基本的に住まいは掘立柱建物であるということが基本で、土間床（どまゆか）で貼床なものもあるのでしょうが、それは基本なのだけれども意外に都の中から竪穴建物が出る。竪穴住居が出るのですね。住居と特定できないのは工房のような使われ方をするものもあったりする。平城京でも右京の北部の方で出た、あるいは長岡京でもそんなのが出ているのですね。そんなものも、もしかしたらそういうものと今お話あったのと関係するということもちょっとこれから検討しないといけないなと思ってお聞きしていました。

（佐藤）

あの村﨑さん今、そういう考古学的な遺物や遺構の面で各地との交流みたいなのが分からない、先ほど八木さんのお話した俘囚っていうのは、律令国家に帰順してきた蝦夷の人たちを律令国家がそれぞれの内国の諸国に安置するといいましょうか、住まわせるということで、これは全国に及んでおります。で、その俘囚のために財源を用意しておりまして、そのための俘囚料稲っていう稲を律令国家諸国に置かせているのですけれども、肥後の国なんかかなりの量の俘囚料稲を持っていまして、これは蝦夷の俘囚の人たちが肥後の国にはたくさん来ていたということは間違いないのですけれども、そういったものが鞠智城で出土するかどうかというようなことを、俘囚の人たちは国府の周囲、わりと

国府の近くに置かれて、ときにはその武力として国司が俘囚の人たちを使うというようなこともあった。平安の時代のことですけれどもあり得るのです。鞠智城を掘られていて発掘されていてあるいは熊本県の発掘調査でそういう交流の痕跡を示すような遺物や遺構っていうのはいかがでしょうか。

（村﨑）

すみません。そのへん不勉強なのですが鞠智城に関していえば、現在までに東北地方の土器が出土したというのは確認されていません。現時点では、ないということになります。ただ、他の地域から入ってきたものとしては、先ほど言われた畿内系の暗文を施した土師器だけだというふうに思っています。で、その他、熊本県内での事例については、改めて調べてみないといけないと考えています。

（佐藤）

畿内系の土師器は七世紀後半ぐらいに鞠智城の造営、繕治の頃に土器が来てると思ってよろしいんでしょうか。

（村﨑）

時期的にはその頃になります。

（佐藤）

そうすると、鞠智城の繕治の頃に畿内の人も鞠智城の造営で来ている。繕治の為に来ている可能性がありますね。

（村﨑）

関わっている可能性はあるだろうと思います。ただ、繕治された後、礎石建物が出てくる段階も含めてなんですけれども「大宰府をして・」という部分を考えたときに、建物の規格性で見てみると大野城、基肄城に関しては三間×五間で共通していますが、鞠智城の場合は、三間×四間で規格が小さい。揃っていないのです。それに、大野城、基肄城の柱間の寸法はおおよそ二・一mですが、鞠智城では、それより短いものもあれば、長いものもある。それぞれが不揃いで揃っていない。なので、大宰府の関わりと畿内系土師器の出土とを含め、どのように大宰府や中央政権が関わって、あるいは肥後国、菊池郡が関わって繕治が行われたのかということについては、今後、整理していく課題なのかなというふうに思っています。

（佐藤）

あの、渡来系との関係で大野城と基肄城は百済からの亡命将軍が築城を指揮したという『日本書紀』

の記事がありますが、鞠智城の場合は百済からの仏像が出ていますよね。

（村﨑）

そうですね。七世紀の後半でいいだろうという、百済系の菩薩立像が出ています。ただ、そういっても当初のその規格性っていうのですか、建物の規格性からするとどうしても大野城や基肄城と比べると規格性が煩雑というか、弱いといった形になるのかなというふうに思います。

（佐藤）

はい、わかりました。今ちょっとその造営、経営の主体っていうことを話していたんですが、鞠智城の場合はその大宰府だとか国司だとか郡司との関係というのはいかがでしょうか。

（村﨑）

先ほども言いましたように、建物の規格性が大野城、基肄城と比べて弱い。違うことで、直接的に大宰府が、大きく関与する、建て替えまで関与するということでは基本的にないのかもしれません。ただ、その命令を受けた国司あるいは郡司なのか、どのレベルなのか分かりませんが、在地の技術を多様した形で造営がなされているのかなというふうに思っています。

（佐藤）

大宰府は九国三島を統治する機関なので、大宰府が中央政府から命令を受けた場合、肥後国司にちゃんとしなさいという場合もあるとは思いますけど、熊谷さんそこらへんはいかがでしょうかね。あと、9世紀の鞠智城院の菊池郡城院の記事を今日お話しておられたけれども。

（熊谷）

東北の城柵と比較した場合、やはり何といっても最大の違いは先ほど来お話に出ていますけれども、政庁が確認されていないということです。それは鞠智城でも同じで、「コの字」形ではないかという建物配置は今日もご指摘がありましたけれども、あれも典型的な「コの字」形と比べるとちょっとそのままではない。違うかなという印象なのですが、結局「コの字」形の建物配置というのは、官衙によくあるものですけれども、これは主に儀式に使われるわけです。古代の政治、マツリゴトというのは、儀式と不可分な面があって、政庁は支配拠点のさらに中枢の施設という位置づけになるわけです。山城でそれがまだ確認されてないということは、やはり地域支配という機能があったにしても中枢の施設ということは、いまの段階ではいえないんじゃないかという感じがしていますけれども。

（佐藤）

今の儀礼の話と合わせて考えると、律令国家の権威の示威、見せるということを國下さんもお話あったんですけれども見せるっていうところからいくと、鞠智城では八角形の建物なんかは見せるような機能があるかなという気もいたしますが、一方で城門の話を聞くとなかなか最近の発掘調査でも南に正門があるか、方位の問題ですね。律令国家の時代だとだいたい南面して正殿を建てて政庁を作るっていうのがあるのですけども、そこらへん村﨑さんいかがですか。鞠智城で、後、八角形の建物についてもちょっと話していただけませんか。

（村﨑）

八角形の建物に関しても、その位置の中で周辺の遺構との関わり、絡みがどういうふうになるのか、まだ、はっきりしないところがあります。で、二棟が対で存在しているということになれば、単に縦列で並ぶということではたぶんにないのだろうと思います。なので、並んだその左右にどういう形で、どういう建物が配置されていたのか。このことについても、今後検討していかないといけない問題かなというふうに思っています。で、南に向いているということでこれまで「堀切門」が正門ではないかという考え方で整理をされていました。ただ、堀切門の構造自体が懸門構造であることが明らかになってきましたので、そういう意味では懸門である堀切門が正門であるというのは、人の出入りそれ

から物の搬入等を考えた場合、適していないだろうと思っております。なので、やや南から少し東あるいは西にふれますけども深迫門、あるいは池ノ尾門が、版築土塁で両側をきちんと固めている。あるいは石塁で谷部を遮蔽して重厚に造っていて、このどちらかが正門である可能性というのも、今後検討しないといけないのかなというふうに思っています。

（佐藤）

確かに堀切門は懸門といいまして、こう歩いて登ってきても最後、階段で上に何メートルか比高差があるところに門ができているということで、物資を運搬しようにも階段を間に、挟まなくちゃいけない。ちょっと物を運びこむというわけにもいかないし、大勢の人がそこを通るっていってもなかなか難しいということだと思いますが、一方で、古代の山城の中には私は例えば、大野城の大宰府口城門などは、下からも見上げれば見えたんじゃないかなというふうに思いますし、屋嶋城の懸門ではあるけれども、あれも遠くから見えるような見せるためのあるいは基肄城もそうですかね。見せるための門じゃないかなと思うような門もあるのですけれどもそういう点はいかかでしょうかね。

（村﨑）

外から見えるっていう位置関係にあるのは、掘切門だけになります。深迫門にしても池ノ尾門にし

ても谷部を取り込んで造られていますので、南側あるいはやや南東側からも見えません。外から見える、外に見せるという意味でいけば、正面に位置するのが掘切門ということになりますね。

（佐藤）

あるいは最も高いところの烽からうけるんじゃないかっていう辺りは、わりと目立つ場所ではありますよね。

（村﨑）

そうですね、地形的にもそういう場所にあるかと思います。

（佐藤）

はい、それでは歴史書に載るか載らないかっていうことも、ちょっとだけ議論したいと思っているのですけれども。今日は、時間の都合で八木さんが早めに退席されるというお話もありますので、八木さんその歴史書に残るか残らないかっていうところで東北城柵もそういうのがあると思うのですけれども何かお考えありませんでしょうか。

（八木）

そうですね、確かに記録のない城柵もあります。例えば出羽の城輪（きのわ）柵という遺跡、これもないのですが、現在は出羽国府と考えられています。ですから、そういう大事な遺跡でも記録に載っていない。その年代の記事が欠落しているということもあると思いますが、そういうことも考えますと、必ずしもその全部が全部載っているわけではない。それが意味があるかどうかは、個々に考えていかなければならないと思います。答えにもなりませんけれども、そういうふうに考えております。

（佐藤）

今日のご講演を含めた形で、お話しそこなったこととかあったらついでにお話していただけるといいと思いますがよろしいですか。それでは時間になりましたらどうぞご退席ください。今の歴史書に載る、載らないという点は熊谷さんいかがでしょうか。

（熊谷）

はい、まずは『日本書紀』の段階と『続日本紀』以降の段階は、ある程度区別する必要があるのかなと思いますが、『日本書紀』で最初に出てくるのが渟足柵、磐舟柵ですけれども、これは当時、越（こしの）国（くに）といったわけです。後に越前、越中、越後などに別れるわけですが、その越国に城柵を造ったとい

うことが出てくるのですが、『日本書紀』のその時期の記事というのは日本海側にひじょうにかたよっているのですね。これは城柵に限らず、有名な阿倍比羅夫の北方遠征というのがその時期の記事としてはかなり詳しく『日本書紀』に載せられているのですけれども、おそらく比羅夫の遠征に類似したような遠征っていうのは太平洋側でもあったのではないかと考えております。これはそれをにおわすような記事が『風土記』に載っているのでそう考えられるのですけれども、そうすると『日本書紀』は太平洋側についてはまったく何も伝えていないということになります。ですから、その辺から考えると、この時期、七世紀後半の時期の城柵遺跡として宮城県仙台市の郡山遺跡というのが見つかっているわけですけれども、これは先ほどもお話があったように多賀城以前の陸奥の国府と考えられているものでして、陸奥国では間違いなく最大級のものなのです。それが文献に載っていないということは、今のような『日本書紀』の記事の残り方からすれば、これは多分に偶発的な要因と思われます。ちなみに、阿倍比羅夫の北方遠征関係の記事は阿倍氏の家記、つまり家の記録などから採用されたというふうに考えられているのですけれども、それに相当するような史料が太平洋側、陸奥方面に関しては残されていなかったと、そういうことなのかなと思います。で、そのあとの『続日本紀』以降ですが、『続日本紀』の時代になっても実は大きな落ちがあって、絶対載せていないとおかしいのに載っていないケースがあります。その代表が多賀城の創建記事なのです。これがありません。さきほどお話しましたように、多賀城の創建年次は多賀城碑からわかるのです。それから、実はその多賀城より

少し古い段階で出羽柵というのが出てくるのですが、これもいきなり出てきて、おそらくその直前に造られたんじゃないかと思うのですけれども、いつ造られたかという記事がない。その手のものはたくさんあって奈良時代でも、例えば天平九年に多賀柵が最初に出てくるのですが、それと同時に先ほども触れたように、玉造（たまつくり）柵とか新田（にった）柵、それから牡鹿（おしか）柵とか色麻（しかま）柵、こういった城柵が出てくるのですが、どれも創建記事がありません。そのうち玉造柵以外はそこに一回しか出てこないわけです。ですからこれもたまたま出てきたという可能性が高いのですね。ただもう一方で、何回か出てくるような城柵もあるわけです。多賀城は創建記事はありませんが、それ以降何度か出てくるわけです。それから、秋田城とか雄勝城とか、陸奥側でいえば胆沢城、志波城も何回か出てくるわけで、そういうふうに何回も出てくる城柵というのは、やはり重要な城柵に違いないと思うのです。ですから一回しか出てこないのはたまたまの可能性も大いにあると思うのですが、なかなか判断が難しいですね。それで、山城の場合、昔から「神籠石（こうごいし）」といわれている文献にまったく出てこない山城がたくさんあるわけですよね。これがどうして出てこないのか、昔は朝鮮式山城を六六三年の白村江の戦い以降と考えて、神籠石系というのはもっとずっと古いとか考えられていたわけですけど、近年の研究からするとどちらもほとんど同じ時期とみた方がいい。場合によっては、神籠石系の方が下るんじゃないかという説さえもあるわけですよね。ですから、それなのになぜかなり多くの白村江の戦い以降に造られたと思われる山城が、文献に記録が残されていたり、残されていなかったりするのかっていうのはひ

じょうに難しい問題だと思います。おそらく、偶発的な要因というのがかなりあるのかなと、ちょっと漠然としていますけど考えています。

（佐藤）

これは以前、鞠智城については六九八年に修理したという繕治という記事が大野城、基肄城とともにあって、私はそれからしても大野城、基肄城が築城されてから三十年ぐらい経って修理が必要になったということで、鞠智城もそれと一緒に書いてありますから間違いなく私は大野城、基肄城とそう違わない年代に建てたと言っていいと思うんです。けれども、造営記事がないっていうのをずいぶん気にしておられたことがありますが、今の熊谷さんのお話だと多賀城でもないということですのでそんなに気にしなくてもということでしょうか。で、一方で長門城のように『日本書紀』に築城記事が書かれていても、未だにどこにあるか分からない。こういう時代になっても二十一世紀になっても分からないというのもあります。また、文献史料が、特に地方史料についてはやっぱり全てが書かれているということではないということかなという気もするけど、その点國下さんはいかがでしょうか。あの都のことはいっぱい書いてあると思うのですけど。

（國下）

いや、軍事施設ならば当然記録は残さないのは当たり前なのかと思うんですが、そうでもないということですので、今残っている記録で本当に物語を作れるかというと作れませんからやっぱり断片的な史料ということなのかな、先ほどの多賀城の創建の記事さえもないっていう不思議なことは都の成立からすると考えられないことですね。そのあたりは、その当時の事情が反映しているのかなあという感じがしますね。

（佐藤）

都のことは、やっぱり書いてありますよね。今日、若狭さんのお話は『古事記』、『日本書紀』以前のお話ですごく、歴史像を描いて、ダイナミックに描いてくださったと思うのですけど、若狭さん今の文献にあるかないかっていうのはいかがですか。考古学の立場っていうのはやっぱりあると思うのですけど。

（若狭）

事件がなかったから書かれなかったと思うのですね。東北城柵の日常の平和的な性格っていうんでしょうか、そういうのを反映している気がいたしますね。つまり、蝦夷とていつも戦っているのでは

なく、基本的には平和裡に競合したり、経済活動をしたりが常態であって、平和だからこそ書かれなかった。特殊な事件や戦闘だからこそ書かれたのではないかと思います。猛々しい蝦夷像を別なものに変えていって、東北に暮らす様々な人たちという視点で見直す必要があるのかなと思いました。

（佐藤）

ありがとうございました。律令国家の対蝦夷政策っていうのは、一番最初には供給政策で先ほど来、お話があったように蝦夷の人たちがやってきたらそれを饗応してお土産を持たせて帰すっていうような形のもので、抵抗する場合は制圧するというのがその次にきて、それから後、北方情勢を偵察するっていうのが陸奥では越後の国司の役割であり城柵もそれを担っていたと思いますけど。三十八年戦争の勇ましい戦争の戦いのときだけが注目されがちだけれども、日常的にはむしろ平和的に蝦夷と交流していたという儀式の場で交流していたということを考えた方がよくて、そういうことは歴史に残りにくいということでしょうか。それではあと10分を切ってしまいましたので、今日お話いただいた先生方にこれからの鞠智城の今日のシンポジウムを受けてこういうところが課題じゃないかみたいな話があれば一言ずつお願いしたいと思うのですけれども、順番にまず熊谷さんいかがでしょうか。

（熊谷）

こういう城柵と山城の比較研究ということ自体、私も今日のお話の最初でお話ししましたようにあまり行われていない未開拓分野なのですね。ですから、今回こういう形で「鞠智城シンポジウム」で両方の比較をテーマにしていただいたというのは、今後の研究のためにとても意義があるんじゃないかなというふうに思っております。個人的なことでいえば、断片的な勉強はそれなりにはしていたつもりなのですが、今回比較をしなさいというテーマをいただいて、いわばにわか勉強を慌ててやったということもあって、これはひじょうに重要で興味あるテーマじゃないかなと、やはり比較することによって城柵、山城、それぞれの個性が、よりはっきりしてくる。そういうメリットは絶対あると思うんですね。で、そういう観点から言わせていただくと鞠智城、それから西日本の山城に関しては、地域支配という視点が近年重んじられてきているわけですけれども、その場合やはり間違いなく地域支配の拠点になっていたのが東北の城柵ですので、それと比較してこういうところは通じる面があるけれどもこういう点は違うんじゃないかというような視点を入れていただけるとこちらもより興味が深まりますし、勉強にもなるんじゃないかなということです。

（佐藤）

ありがとうございます。それでは國下さん。

（國下）

このシンポジウムの前に、改めて鞠智城に足を運んで、見たこともない話はできませんから、まずは見にいこうということで知り合いと一緒に行きまして。最初に思ったのは、外郭の土塁と中心的な施設群とのあいだに谷がありましてね、で、水田経営がされるような谷なわけですね。本当にこれ城なのだろうかと。本当にその防御的な機能っていうのはあるんだろうかっていうことを現地で思いました。しかし、今日改めてシンポジウムで、いろんな形の城柵なり山城を見ますと、当然これは鞠智城がこの地に選択された意味っていうのはたぶんあるのだろうというふうに改めて思いました。そうしますと鞠智城が持っている機能っていったいどういうところがあるのかっていうのをはやり比較研究をしていくことが必要なのだろうなというふうに思いました。今日の冒頭のお話ともつながるかと思います。それともう一つ、私は都の研究をやっているのですが、やはり井の中の蛙ということでして、都のことばかりやっていますと国会議事堂ばっかり見ているようなことですのでやはり、律令国家というは列島があって地方の政治があってこそ成り立っているということを改めて、今日感じました。今、研究というのは東アジアのような視点でやっていかなければならない状況ではありますが、それぞれの東北なり九州なりの長い城柵なり山城研究の礎があってこそできあがっているのだなっていうのを改め思いました。俄かでなかなか勉強できないのですが、そういったところまで目配りして、これからも考えていきたいなというふうな感想を持ちました。ありがとうございました。

（佐藤）

ありがとうございます。それでは若狭さん。

（若狭）

私も五年前に鞠智城に行ったことがあるのですけれども。何故こんな内陸にあるのかというのが疑問でした。むしろ海から来る唐・新羅を迎え打つならば、沿岸部にあってしかるべきなのに、何故ここなのだろうというのがとても疑問だったのですが、菊池川流域は古墳文化もやはり非常に特殊、特徴的です。装飾古墳があって、今日ご紹介した宮城県までその肥後型の横穴墓がきています。ですので、鞠智城の成立にあたってはやはり前史から、今日、私がちょっとお話させていただいたように弥生時代、古墳時代からの地域色、その独自性とか歴史的な位置だとか交通上の問題だとかを丹念にあらっていくことによって、その像が結ばれるんじゃないかと思いました。それと私はかつて自治体で史跡整備を担当しておりましたので、是非、シンポジウムの成果を活かして魅力的な史跡公園を整備し、多くの方々を迎えていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

（佐藤）

史跡公園の課題も出てきましたけど、村﨑さんじゃあ最後にお願いします。

（村﨑）

今日は、城柵との比較ということでいろんなご意見をいただきました。そこで、鞠智城から地域支配の在り方をきちんと見ていく、どのように見ていくのか、こういう新たな課題をいただいたような気がします。それと、鞠智城の前史である古墳時代の社会がどのように築城やその場所の選地、あるいはバックボーンとしてどういうふうな影響を与えたのか、そのことについても今後、検討していかないといけないのかなというふうに思っています。で、菊鹿盆地の築城前夜を俯瞰すると古墳時代中期後半では、盆地の西側の方に大きな古墳がたくさん築かれ、この状態は後期前半まで大きくは変わりません。それが、後期後半になると一変して東へ移ってきます。そして、東端の丘陵上に鞠智城が築かれる。その勢力の移動についても、もう少し検討していく必要があると考えています。築城の経緯だとかその後の経営のあり方だとかということを考えるうえでも重要だと思っています。そういう意味で、いい刺激になりました。ありがとうございました。

（佐藤）

あの鞠智城につきまして今までのお話を伺っていると、まだまだ研究しなくちゃいけない課題がいっぱいあるというふうに思います。環境史の問題も今日、若狭さんから出ましたし、私は菊池川の下流域ってラグーンがだいぶ内側まで入っているのじゃないかと思っていて、あまり今の海岸線で考

えないほうがいいと思っているのですけど。そういうことも含めてまだまだ課題があるのかなというふうに思いました。今日は5人の先生方の講演を聞いていただきました。そのあと、パネルディスカッションのほうは私の司会の不手際でちょっと時間が偏ってしまったかもしれませんけれども、鞠智城が持つ魅力といいましょうか、人文知の楽しい世界を、あの感じていただけたんじゃないのかなと思います。今後ともぜひ鞠智城につきましては来年の3月には若手研究助成の成果の報告会が熊本でもありますし、今後とも関心をお持ちいただいて、ぜひ現地にもおいでいただければと思います。今日はどうもありがとうございました。先生方ありがとうございました。

（司会）

コーディネーターの佐藤様、パネリストの熊谷様、國下様、若狭様、長時間にわたりまことにありがとうございました。会場のみなさま今一度盛大な拍手おおくりください。

どうもありがとうございました。本当にあの鞠智城の魅力に触れることができましたし、ご専門の先生方の深いお話をお伺いすることができました。まことにありがとうございました。以上を持ちまして本日の全てのプログラムを終了いたします。長時間にわたりまして最後までご聴講をいただきまして皆さまありがとうございました。受付におきましてはアンケートの回収をおこなっております。お帰りの際にはアンケートへのご協力をどうぞよろしくお願いいたします。本日は鞠智城シンポジウ

ム、古代の山城と東北城柵にご来場いただきまして誠にありがとうございました。